

NAGOYA UNIVERSITY PROFILE 2014

名古屋大学プロフィール



NAGOYA UNIVERSITY
PROFILE 2014

界を

を、超える。

新たな道を拓くために、 領域を、限界を超えていく。

グローバル化による社会構造の変化の中で、大きな岐路に立つ日本。
既成概念や一つの価値観にとらわれるのではなく、
未来を見つめた柔軟で多様な発想が、今こそ求められています。
名古屋大学は、学术界と産業界、性別や国境、学問分野などの間に横たわる
あらゆる界を超えることで、限界を超える力を発揮。
さまざまな連携と融合を先駆的に進めながら
日本と世界の未来のために、新たな道を拓いていきます。

目次 Contents

	巻頭対談
04	研究力が未来を創る。 梶原定征／東レ株式会社代表取締役会長・日本経済団体連合会会長 × 濱口道成／名古屋大学総長
	特集1
12	次代を動かす女性たち。 総長と語り合う、 女子学生座談会「未来へ翔ぶ力」 濱口道成／名古屋大学総長 × 坂本あずさ／法学部3年 チャン・トゥー・チャン／大学院法学研究科博士課程前期課程1年 小田春佳／大学院理学研究科博士課程後期課程2年 ランダ・タン／グローバル30化学系プログラム(理学部)3年
20	「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラム 東村博子／大学院生命農学研究科教授
22	名古屋大学理系女子学生コミュニティ あかりん☆隊
23	男女共同参画室
	特集2
24	世界最高水準の研究大学へ。 國枝秀世／理事(研究・学生支援・入試関係担当)・副総長
28	派遣学生からのメッセージ 大学の世界展開力強化事業 ASEAN諸国等との大学間交流形成支援 「ASEAN地域発展のための次世代国際協力リーダー養成プログラム」 永田 碧／法学部3年 キャンパス・アジア中核拠点形成支援 「東アジア『ユス・コムーネ』(共通法)形成にむけた法的・政治的認識共同体の人材育成」 辻 卓弥／法学部4年
30	博士課程教育リーディングプログラム採択一覧
31	大学概要
32	組織・機構



巻頭対談

梶原定征 × 瀧口道成

東レ株式会社代表取締役会長 | 日本経済団体連合会会長

名古屋大学総長

資源のない国・日本を、これまでも、これからも支えていくもの。
それは世界に新しい価値をもたらす、圧倒的な研究力です。
日本経団連会長である梶原定征東レ代表取締役会長と瀧口道成総長の対談では、
研究力を核として日本と世界の未来を創造するために、名古屋大学が果たすべき役割が語られました。

研究力が未来を創る。

本質的な研究開発を、 息長く続けられることが日本の強み

榊原定征 Sadayuki Sakakibara



榊原定征

Sadayuki Sakakibara

1943年生まれ。名古屋大学大学院工学研究科修士課程修了後、東レ株式会社入社。同社代表取締役社長を経て、2010年より現職。ボーイング社と単独供給契約を結ぶなど、世界最大の炭素繊維メーカーへ発展させる。日本経済団体連合会会長、日本化学会会長。

世界最高水準の研究を若手が展開

濱口 | 近年、日本の研究力低下が危惧されております。特に私は、若い研究者の活躍の場が少ないのが影響しているのではないかと感じておりますが、いかがお考えでしょうか。

榊原 | おっしゃる通りです。私は日本化学会会長として、世界中の化学分野の論文に関し、その動向をウォッチしておりますが、その中で注目される日本の学術論文の数は年々減少傾向にあります。やはり、自らの斬新なアイデアで高度な研究を立ち上げ、推進する若者が減っていることも一因でしょう。

濱口 | 実はノーベル賞を受賞された本学ゆかりの先生方を見ると、その中心となる研究は若手の頃に取り組まれたものが多いんです。当時の本学には、若手の発想を豊かに伸ばす土壌があったのでしょうか。そこで私も現代にそういう環境を醸成しようと、領域を問わず若手や女性研究者を採用し、研究活動を支援する名古屋大学若手育成プログラムを始めました。これまでに60人程を採用し、優秀な人材が育ちつつあります。また、世界トップレベル研究拠点プログラム^(※1)に採択された「トランスフォーマティブ生命分子研究所(ITbM)」でも、40代前半の研究者からなる独創的なグループを形成してお

ります。若い活力が実を結んだのか、昨年度は科学研究費の採択数が研究者一人あたりでは国立総合大学内でトップとなり、研究大学強化促進事業^(※2)の採択においても高い評価をいただきました。

榊原 | 名古屋大学は、研究大学として革新的な取り組みをされていていらっしゃいますね。ぜひ、日本を支える役割を果たしていただきたいと思っております。それに私が感じますのは、日本全体の研究力の低下は問題ではありますが、研究者個人の力は決して衰えていないということです。安心して研究できる環境があれば、日本の研究者は必ず成果を出す。総長がお考えのように、若手がじっくりと研究できるよう支援していくことが大切です。

産学官でイノベーションを創出

濱口 | 研究内容について言えば、今、大学には環境破壊や資源の枯渇など人類が直面する課題に応え、持続可能な社会を実現するための研究が求められていると思います。それには企業との連携が不可欠であり、御社にも参画いただいている名古屋大学ナショナルコンポジットセンター^(※3)では、車をはじめ日用的な製品に炭素繊維を活用する技術開発を進めております。また、年齢を重ねても生き活きと暮らせる

未来社会の創造を目指す名古屋COI拠点^(※4)では、将来像から必要な技術や社会システムを創出していくバックキャスト型の研究を取り入れ、企業と連携することで、大学の研究組織も活性化したいと考えております。

榊原 | 製造業立国たる日本が、今後も国際競争に勝ち、永続的に発展していくためには、世界ナンバーワン、オンリーワンの事業を構築しなければなりません。それを可能にするのは科学技術イノベーションであり、大学などの高度な基礎研究の成果と企業が保有するコア技術を融合させる産学官連携、オープンイノベーションです。その点で、日本の製造業の中心地にある名古屋大学に、世界が注目する炭素繊維複合材料の研究拠点が誕生したことは、非常に意味のあることだと思います。

濱口 | そうですね。ぜひ、産学官連携を推進し、成果を出したいと考えます。その際、参考にしたいのが、御社の炭素繊維開発の歩みです。先が見えない中、粘



(※1)

世界トップレベル研究拠点プログラム

文部科学省の事業。世界から第一線の研究者が集まる、優れた研究環境と高い研究水準を誇る拠点形成を目指す。名古屋大学の「トランスフォーマティブ生命分子研究所(ITbM)」では、生命科学・技術を根底から変える革新的機能分子の創出に挑んでいる。

(※2)

研究大学強化促進事業

文部科学省の事業。日本全体の研究力の強化を図るため、大学等の研究マネジメント人材群の確保や集中的な研究環境改革といった取り組みを支援する。名古屋大学は支援対象となった22機関のうち、最高評価のトップ4入りを果たす。

(※3)

名古屋大学 ナショナルコンポジットセンター

2012年4月に設立された炭素繊維複合材料の研究開発拠点。国の委託事業で、東レのほか自動車・航空機関連メーカー、宇宙航空研究開発機構(JAXA)、他の大学や研究機関などが参加。

(※4)

名古屋COI拠点

文部科学省の革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)に採択された「多様化・個別化社会イノベーションデザイン拠点」。「いつまでも生き活きと活動し暮らせる社会とモビリティ」の実現を目指す。

(※5)
国際化拠点整備事業
(グローバル30プログラム)

文部科学省の事業。英語による授業のみで学位取得を可能にするなど、日本を代表する国際化拠点を形成し、そこで日本人学生と留学生が切磋琢磨することで、国際的に活躍できる人材の養成を目指す。現在は、「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」に名称変更。

(※6)
名古屋大学
アジアサテライトキャンパス

ベトナム、カンボジア、モンゴル、インドネシア、ミャンマー、ラオス、ウズベキスタンの7か国に名古屋大学のサテライトキャンパスを設置。アジア諸国の国家中枢人材養成プログラムを創設し、各国の中枢を担う人材育成に貢献する。

り強く研究を続けられ、世界トップの炭素繊維メーカーの座を築かれました。

榊原 | 研究を始めた1960年代は、炭素繊維は人工衛星などごく一部の製品にしか使われていませんでしたが、弊社の研究者たちは炭素繊維が必ず21世紀の基幹材料になると信じ、「東レの炭素繊維で世界に黒い飛行機を飛ばすぞ」と情熱を傾けてきました。1970年代には世界中の化学会社が入参したもの、航空機に求められる技術レベルに到達できず、日本の会社以外はことごとく撤退しました。この経験があればこそ、本質的な研究開発を息長く続けられることが日本の強みだと、私は確信しています。このような研究開発の事例をもう一つご紹介すると、弊社の海水淡水化技術があげられます。海はあっても水がない世界の人々のために海水を飲み水に変える逆浸透膜の技術を、約40年かけて追求してきました。現在は1日に約3,000万トン、約1億2,000万人をまかなえる淡水を生み出しています。



濱口 | CO₂排出や水不足など、まさに科学技術で地球規模の課題を解決したのが御社の製品です。やはり長期戦略のもと、研究開発を進めていくのが日本の進むべき道であると、私もあらためて意を強くいたしました。

国際化により日本人学生が成長

濱口 | 御社のように世界にイノベーションを起こすには、私は多様性が必要だと感じております。そこで本学では学生に文化や価値の多様性を体感させようと、国際化を進めてきました。英語教育を強化するとともに、日本人学生の海外派遣を推奨し、国際化拠点整備事業(グローバル30プログラム)^(※5)によって世界中から優秀な留学生が集まってきた結果、日本人学生の海外派遣数は5年で4倍に、海外からの留学生は年2,000人を超えるまでになりました。

榊原 | 素晴らしい取り組みですね。革新的なアイデアは異文化との接触の中で生まれるものです。弊社でも若い研究者や技術者を海外へ送り出していますが、大きな成果を手にし、自信もつけて帰ってきます。やはり若いときに世界中の人材と切磋琢磨することが大切で、それが日本の研究力の底上げにもつながってくるはずです。また、我々のような企業にとって、グロー

バル人材の育成は必須の要素です。英語力は当然ですが、相手の国の文化や伝統を尊重できると同時に、日本の文化や伝統を理解し伝えることができこそ、本当の信頼関係が構築できます。ただ、こうした国際的な視野を持つには経験を積む必要があります。その点でも名古屋大学の取り組みは価値があり、先駆的なものと言えるのではないのでしょうか。

濱口 | ありがとうございます。優秀で志の高い留学生とともに学ぶことで、日本人学生も刺激を受けるのでしょう。複眼的な思考を身につけ、英語で自分の意見を発信できるようになるなど、私も成果を実感しております。

アジアのハブ大学からリーダーを

濱口 | 国際化の面では、本学は時代在先駆けてアジア展開に力を入れ、アジアの法整備支援や医療行政に携わる人材育成を続けてきました。今、卒業生の多くが各国政府の要職に就いております。こうした実績を礎に、今後3年間でアジア7か国に名古屋大学アジアサテライトキャンパス^(※6)を開設し、国の中枢を支える人材の博士号取得を支援していく予定です。

榊原 | 世界経済の成長の核であるアジア諸国の、まさに基幹部分を担っていく人材育成ですから、将来にわたって

濱口道成

Michinari Hamaguchi

1951年生まれ。名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了。医学博士。専門分野は腫瘍生物学。消化器癌の中で、最も治療が困難な胆管癌や難治乳癌の悪性転化機構を解明する。名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長を経て、2009年より現職。



研究大学として、世界や時代を変革する
新しい価値を提示したい

濱口道成

Michinari Hamaguchi

日本との強い連携が期待できます。アジアの成長のために日本が協力する。そして、日本もともに成長していくために人的なネットワークを築くことは非常に重要です。ぜひアジアのハブ大学としての取り組みを強化していただきたいと思います。

濱口 | 明治以降、日本がさまざまな困難を乗り越えて今の安全安心な社会を実現してきた経験は、人類共通の財産であり、それをアジアに紹介することは日本の高等教育機関の重要な仕事だと考えております。その中で、本学はアジアに拠点を設置し、博士課程教育リーディングプログラム^(※7)の「PhDプロフェッショナル登龍門」では、日本人学生をアジアに送り、アジア諸国との連携を担うグローバルリーダーの育成を、また、「『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム」では、貧困や健康問題、ジェンダー格差など多くの課題を、アジアの女性とともに超えていく女性リーダーの輩出を目指しています。近隣諸国と未来志向の関係を築くためにも、若い世代の交流を促し、日本とアジアが相互補完しながら発展していく構図を描かなければなりません。

榊原 | その通りです。弊社は20年程前にインドネシア、タイ、マレーシアの3か国に東レ科学振興財団を設立し、若手研究者への助成や理科教員への顕彰などを継続してきました。地道な活動ではありますが、今後のアジアとの関係を考えてもこうした貢献は重要で、名古屋大学の活動に対する国の期待も大きいと思います。

スーパーグローバル大学を
目指して

濱口 | 最後に名古屋大学への期待をお聞かせ願えますか。

榊原 | 世界最先端の研究拠点として、世界トップレベルの教員を招へいするなど、名古屋大学の先進的な取り組みは大変心強いものです。国際的に確固たる地位を築かれることを期待しております。また、「アジアのハブ名古屋」にある産学官共同研究の中核拠点として、日本を研究面・人材面で支えていただきたいですね。

濱口 | はい。研究大学として多様な価値観や俯瞰的な視野を取り入れ、世界や時代を変革する新しい価値を提示したいと考えます。そのために本学は若手・女性研究者を支援し、学生の海外派遣を進め、アジア戦略に力を入れてきました。また、次の目標として掲げているのが、欧米との高度な研究交流です。欧米の展開を理解しながらアジアの発展を考えることができる大学、世界に冠たるスーパーグローバル大学を目指していきます。

榊原 | 研究拠点と同時に、グローバル人材およびアジアの今後を担う人材の教育拠点としても成果を上げていただきたいと思います。企業も学生をインターンシップで受け入れるなど、協力できる点があるでしょう。

濱口 | ぜひ、ご協力をお願いしたいと思います。また、私は以前から、会長は本学が学術憲章に掲げる勇氣ある知識人そのものである、と感じておりました。ニューヨーク駐在中にアメリカ全土を飛び回ったり、不屈の精神で炭素繊維の事業化を成し遂げたりと、その勇氣はどこから生まれてくるものなのでしょうか。

榊原 | やはり、大きな転機となったのが3年半のアメリカ生活です。私はまだ若かったのですが、研究担当として現地の大学や企業を訪れる中で、一流の先生方や企業人の聲咳に接しました。そこで語学力や交渉力が鍛えられ

たのはもちろん、世界へと目が開かれ、アメリカの人々の考え方も理解できるようになりました。こうした経験を後輩の皆さんにも、ぜひ味わっていただきたい。若ければ若いほど、グローバルな発想や視野は身につきやすいものです。学生時代に国際的な経験を積めば、社会に出たとき、大きな力になると思います。

濱口 | 研究部門出身で今や経済界トップの会長の存在は、若者たちにとって自らの可能性を広げるロールモデルとなるものです。大学としても若い人材をこれまで以上に研究面・教育面からバックアップし、世界で成果を創出できるリーダー人材を輩出したいと思います。本日は貴重なお話を、ありがとうございました。



(※7)

博士課程教育リーディングプログラム

文部科学省の事業。俯瞰力と独創力を備え、広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーを育成するため、産学官が協力し、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した大学院教育を行う。名古屋大学では現在6つのプログラムが採択されている。

→30ページ参照



特集1

次代を動かす女性たち。

未来の理想を描き、困難もしなやかに超えていく女性たち。
そんな限りない女性の力が、ようやく注目されています。
名古屋大学は、時代に先駆けて女性研究者支援を進め
世界を導く女性リーダーの教育を始めています。
ここからは、未来に挑む女子学生の姿や
女性リーダー育成プログラムなどについてご紹介します。



総長と語り合う、

女子学生座談会 「未来へ翔ぶ力」

名古屋大学的女子学生は、とても活発で優秀。そんな評判があちこちで聞かれるように、その成長は頼もしく、未来への飛躍が期待されています。今回は、濱口道成総長のもと、4人女子学生が集まり将来展望や名古屋大学の魅力などについて語り合いました。

写真左から 小田春佳／ラシダ・タン／濱口道成／坂本あずさ／チャン・トゥー・チャン

(※1)

名古屋大学日本法教育研究センター

日本語による日本法教育を行い、自国の法整備に貢献できる人材を育成するため、全国の大学に先駆けて名古屋大学がアジア各国に設立。2014年現在、7か国8か所にセンターを置く。

坂本あずさ
Azusa Sakamoto

法学部3年
(愛知県名古屋市出身)



将来は、日本とアジアをつなぐ仕事に就きたい ―― 坂本あずさ

国際的でレベルの高い
教育・研究内容に惹かれて

濱口 | 今、アジアや世界は国境紛争や食糧問題などを抱え、幸福で平和な社会が実現しにくい時代にあります。しかし、これらの問題を乗り越えていくときに、私は女性の力が大きいのではないと思っています。その中で心強いのが、我が名古屋大学的女性たちです。活躍する女性教員の後に続けと、優秀な女子学生が集まってきているように感じますが、皆さんはどうして名古屋大学に入学されたんですか。

坂本 | 私は名古屋出身で、高校時代から名古屋大学の法整備支援の取り組みに興味を持ってきました。また、アジアに強い大学であることに魅力を感じ、留学したいという思いもあって入学したんです。望んだ通り、キャンパスASEANのプログラムでベトナムに留学し、法整備支援の現場を体験するなど充実した大学生活を送っています。

チャン | 私はそのベトナムに設立された

名古屋大学日本法教育研究センター(※1)で、日本法を学んできました。法学研究科へ進学する際は修士課程までと考えていたんですが、世界や母国も含めたフロンティアアジアのことが学べるプログラムに惹かれ、「PhDプロフェッショナル登龍門」に応募し、日本で博士号を取得する決意をしました。

タン | 教育内容に魅力を感じたという点では、私も同じです。名古屋大学のG30国際プログラムでは幅広い授業が英語で受けられ、日本語も学べるので私の希望にピッタリでした。それに名古屋大学はノーベル賞受賞者も多く、そういった方々を輩出した理学部の研究室で学びたいとも思いました。また、学術憲章にある「勇気ある知識人」という言葉が気持ちを奮い立たせてくれ、高校卒業後、シンガポールからやって来ました。

小田 | 私は他大学を卒業後、名古屋大学の理学研究科へ入学しました。いろいろな大学院を検討しましたが、自分の取り組みたい研究が行われていて、

研究設備が整っていることが決め手でした。実際、学内には最先端の研究設備が揃い、それを各研究室が共通で使えるので交流や刺激も多く、とても研究しやすい環境だと感じています。

イノベーションを起こすのは
女性と留学生の力

濱口 | 日本ではあらゆる分野でイノベーションが求められていますが、イノベーションとは、今までにない価値観を提示できる人が現れることで起きてくるものです。その意味でも私は女性と留学生の活躍に期待をしていますが、今、皆さんはどのような分野に取り組んでいるのですか。

小田 | 私は受精卵の研究をしています。すべての動物は受精卵から始まるわけですが、受精卵と普通の細胞は同じものではありません。そこで、私はDNAを包む核膜に注目し、なぜ違うのか、違うことがどう役立っているのかを調べています。

タン | 4年になったら、量子化学の計算

(※2)
ポストク

Postdoctoral Fellowの略。博士号取得後、任期制の職に就いている博士研究員のこと。



ベトナムと日本の法を理解し、 問題解決のお手伝いを

——— チャン・トゥー・チャン

を扱う研究室に入ろうかと考えています。数学が苦手なので、その研究室に入るのはハードルが高いのですが、計算を通じて多様な分野の研究にふれることができ、幅広い化学の知識を持った研究室の皆さんに憧れているので、ぜひチャレンジしたいです。

チャン | 法律の中でも日本の民法、特に代理制度を研究しています。ベトナムの民法にはない制度があり、日本の制度をそのまま受け入れるのか、それとも母国の状況に合わせて変えていくべきか。民法の歴史と立法過程などを分析して検討したいと考えているところです。

坂本 | 私はアジア法を勉強していますが、2年次後期から半年間ベトナムに留学したことで、いろいろ見えてきたものがあります。例えば、法律に対する日本人とベトナム人の意識の違い。日本人にとって法律は守って当然のものです。ベトナム人には法がすべてではなく、円満な解決を選ぶ場合もあるようです。それは社会や文化にも関連するところがあって、そうした背景も勉強していけたらと思っています。

アジア・世界を舞台にした活躍を

チャン | 今、お話に出たようにベトナムと日本では法への意識が違うため、それが問題を長引かせることもあります。司法制度の独立性がないベトナムの複雑な事情も、日本や先進国の企業の考え方も理解した上で、いつか自分の弁護士事務所を設立して、そういった問題解決のお手伝いができればと思っています。

坂本 | 私はベトナムに行く前は法整備支援の現場で働きたいと思っていたんですが、現地で過ごすうちに日本文化などを発信する活動や、現地に進出した日本企業の法務支援などにも、興味の幅が広がってきました。いずれにせよ、日本とベトナム、アジアをつなぐ仕事に就きたいと思っています。

濱口 | ぜひ実現していただきたいですね。私は日本の女性にも、もっとアジアや世界に出かけて勉強してもらいたいですし、働く場所もグローバルに考えてもらいたいと思っています。そうすることでアジアや世界の新しい未来が



拓けてくるのではないのでしょうか。

小田 | 私も学位を取得したら、ポストク^(※2)として海外に出たいと考えています。研究職を一生の仕事にしたいと思っていますので、仕事があればどこへでも行くつもりです。

タン | 新しい分野を学ぶたびに道が広がるので、まだ私は将来を決めかねて

います。研究者になるのもいいし、医師になるのも幼い頃からの夢でした。何らかの形で人を助ける仕事がしたいとは考えています。

濱口 | キャリアパス支援で言えば、名古屋大学はインターンシップなどが充実し、就職率は全国でもトップクラスです。また、ビジネス人材育成セン

ターでは、博士人材への支援にも力を入れ、高い就職実績を誇ります。今後は地元企業と連携して産学連携講座をつくるなど、もっと女性の就職先を広げていく予定です。

チャン | 留学生の中には日本で就職したいと考えている人もいます。もう少し、選択肢が広がるようなサポートをしていただけたらと思います。

濱口 | そうですね。今回、「PhDプロフェッショナル登龍門」などでは企業の方にもメンターとして参加していただくなど、留学生と企業のニーズをつなぐ道をつくりました。いろいろな情報が留学生の皆さんにも届くように努力したいと考えています。

ワークライフバランスのモデルを 名古屋大学から世界へ

濱口 | ただ、就職支援とは別の観点で女性のキャリアパスを見たときに、日本は女性の社会進出が遅れていると思います。ベトナムやシンガポールの方が、ずっと女性が社会で活躍していますね。

タン | そうですね、子どもがいても女

性はみんな仕事をしています。

濱口 | そう思って、今年から始めたのが「『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム」です。男女共学の大学の中に女子大学のような環境をつくることで、持てる能力を発揮し、女性リーダーとして育ってもらいたいと思っています。

小田 | 女性の能力発揮という点では、私が所属する理系女子学生のコミュニティ、あかりんご隊の活動も挙げられます。理系の中でマイノリティである女子学生が自由に活動できる場として、これまでに女子中高生への理系進学セミナーやワークライフバランスに関するセミナーなども開催してきました。

濱口 | やはり、女性にとって一番難しいのはワークライフバランスです。結婚や出産の時期が仕事をする上で大事な時期と重なり、仕事か家庭かと選択を迫られる。そこが問題ですね。

小田 | その点で、女子学生にとって一番身近なロールモデルは、大学の女性教員ではないでしょうか。まだまだ助教以上の女性は限られていますが、理学研究科

優秀な女性研究者が、 世界中から集まってくる大学に

——— 小田春佳





の生命分野では最近、女性教員が増えてきました。数を増やすと同時に、ワークライフバランスの理想的なモデルを名古屋大学が実現できれば、女子学生の希望になり、優秀な女性研究者が世界中から集まってくると思うんです。

濱口 | その通りですね。ワークライフバランスというと、育児休暇を長くすればいいという考えに陥りがちですが、名古屋大学では女性研究者の方に早く第一線に復帰してもらうために、学内に保育園や学童保育所を開設しています。こうした仕組みを全国に広げなければなりません。

安心のサポートが
女子学生を飛躍させる

濱口 | 最後に名古屋大学の今後について、期待や意見を聞かせてもらえますか。

坂本 | 名古屋大学は短期から長期まで留学プログラムが充実しています。国際的に活躍するための制度が揃い、関心のある女子学生がとても多いので、

ますます大学がグローバルになるのではと期待しています。

タン | 私はG30国際プログラムのサポートは素晴らしいと思っています。初年度は1年間寮に住むことができるので安心ですし、大学からの日本語のメールもG30では英訳してくれます。そういうサポートの継続が大切ですね。

坂本 | やはり留学生にとっても日本人学生にとっても、留学先でのサポートがしっかりした制度があるのは魅力です。保護者も安心し、女子学生が留学する追い風になると思います。

濱口 | 名古屋大学は学生の留学を推奨していますが、最初は必ず大学のネットワークのある場所に送り出し、学生にリスクを負わせないということを徹底してきました。また、海外での健康管理にも注意を払い、現地の病院と連携して病気になった時のケアも考えています。

チャン | それをお聞きして安心しました。海外での安全を考えてこれほど準備

をしていることを学生は知らないのでは、詳しく伝えることができれば、もっと挑戦する人が増えるかもしれません。

小田 | そうですね。私も入学してから知ったのですが、例えば、研究員ポストへの申請書類の書き方や面接指導など研究者育成の点でも、支援がきめ細かいんです。こうしたサポートをアピールするといいですね。また、国際化の面では、学食メニューの英語表示やムスリムの方へのハラールフード^(※3)の提供など、日常生活のサポートも充実してグローバルなキャンパスに成長していけば、と思います。

濱口 | ありがとうございます。皆さんの意見をぜひ参考にしたいと思います。これからの人類社会は持続可能性が大きなテーマですが、それを実現するには、困難な問題も粘り強く解決していく女性の能力が必要です。皆さんにはその才能を発揮して、人類の未来を切り拓いてほしいと願っています。

多くの授業が英語で学べ、 留学生への充実したサポートも魅力

—— ラシダ・タン

ラシダ・タン
Raashidah TAN

グローバル30
化学系プログラム(理学部)3年
(シンガポール出身)



(※3)
ハラールフード
イスラム教の戒律に則った食べ物のこと。

「ウェルビーイング in アジア」

実現のための女性リーダー育成プログラム

女性 日本の成長の伸びしろ

2013年度の博士課程教育リーディングプログラムに、名古屋大学の『『ウェルビーイングinアジア』実現のための女性リーダー育成プログラム』が採択されました。その最大の特長は、総合大学では初となる女性リーダー育成の取り組みです。日本は女性リーダーが諸外国に比べて圧倒的に少なく、男女格差を示すジェンダーギャップ指数が136か国中105位と先進国で最下位（世界経済フォーラム2013年発表）。既にアジア諸国で多くの女性リーダーが活躍する中、日本は未だ低いレベルにあります。こうした現状を私は残念に思う反面、「埋もれた資源」と呼ばれる女性たちが活躍すれば、日本にはもっと成長できる伸びしろがあるとも期待しています。

女性の活用は今や日本の成長戦略の重要なテーマですが、本学は時代に先駆けて男女共同参画を進め、ソフト・ハード両面から女性研究者支援を続けてきました。本プログラムは「女性の活躍が21世紀の日本を救う!」をモットーとする濱口総長の発案によるもので、これまでの実績や学風がグローバルに活躍する女性リーダー育成の強みとなると確信しています。

アジアとパートナーシップを結び 持続可能な社会を

本プログラムは、アジアのウェルビーイングを実現できる女性リーダーの育成を目標に掲げています。ウェルビーイングとは、個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味し、誰もがその権利を持っているはずです。しか

し、アジア諸国は発展段階が異なり、乳児や妊産婦の高い死亡率が問題になっている国もあれば、日本と同様に生活習慣病が問題になっている国もあるなど、それぞれ多様な問題を抱えています。ウェルビーイングを実現するには、こうした問題に関して、日本がこれまでの経験を活かして解決に貢献する一方で、多くの女性リーダーを輩出してきたアジア諸国に学び、日本とアジアがともに持続可能な社会を発展させていくことが必要です。そのためにアジアの女性リーダーとのパートナーシップを担う、カウンターパートとなる女性リーダーを本プログラムから輩出したいと考えています。

異分野融合が解決策を生み 新しい可能性も広げる

女性リーダー育成を目指して、本プログラムには国際開発研究科、教育発達科学研究科、生命農学研究科、医学系研究科の4研究科が集結し、農学国際教育協力研究センター、男女共同参画室も参加。食・健康・環境・社会システム・教育を柱に、研究領域の垣根を越えた連携教育を展開していきます。例えば、人の健康を守るためには、食を作る農学分野、医療や衛生を担う医学・保健分野、社会システムを築く国際開発分野、人材育成の根幹をなす教育分野からのアプローチが必要で、どれも欠くことはできません。また、アジアのどこかで発生した鳥インフルエンザが世界中に広がり、私たちが脅かすように、人と動物はつながっており、「世界は1つ、健康は1つ」すなわち「One health」という考えに貫かれた安全管理が必要です。世界の健康に貢献しなければ日本の健康も維持できず、分野を越えた連携が、ウェルビーイングの実現には求められるのです。

こうした研究科を越えた異分野融合からは、新しい化学反応が生まれます。私自身、さまざまな分野の先生方とプログラム内容を話し合う中で、その面白さを実感していますが、融合は学生をさらに高いレベルへと導いていくはずです。また、若いときの異文化体験は、自分のミッションに気づくチャンス。そこで、教育面ではアジア諸国での海外研修を充実させ、現地の学生とチームを組んで英語で活動成果を発表させるなど、学生の成長を促す実践を重視しています。異文化との出会いや切磋琢磨は、多様性を認める心を育ててくれます。そして、学生は現地に立つことで、自分の専門性をアジアのウェルビーイングに活かすことができると、その使命に気づくはずです。

高い志とビジョニング、 俯瞰力を持った女性リーダーへ

本プログラムを修了した学生は、研究科での高度な専門性に立脚しつつ、俯瞰的な視野も持った博士号取得者として社会へ羽ばたいていきます。キャリアパスとしては、グローバル企業、国際機関、政策決定機関などへの就職を想定し、充実した支援体制を用意します。政策決定や企業リーダーに、科学のマインドを持つ博士人材が少ないのも日本の問題です。学生たちにはそれぞれのフィールドで、ぜひ科学的根拠に基づく提案を行い、問題解決にあたってほしいですね。そのとき重要なのは、今、何ができるかではなく、将来どうあるべきか、自分が何をすべきかというビジョニングです。先に制約を考えるのではなく、高い志と確かなビジョニングのもと、制約を乗り越えていく。そんな力強い女性リーダーとして、本学の女子学生がアジアの幸福と平和を実現してくれるものと、心から期待しています。



アジアの女性と連携し、未来を拓く
女性リーダーを育成します

束村博子

Hiroko Tsukamura

1991年、名古屋大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。専門は生殖科学・神経内分泌学。現在、名古屋大学大学院生命農学研究科教授。名古屋大学男女共同参画室長。



名古屋大学理系女子学生コミュニティ あかりんご隊



交流の輪を広げ
やりたいことを実現する場

あかりんご隊は、“もっと学生生活を充実させたい”という学生の声から生まれた、理系女子学生のコミュニティ。理系の中で少数派になりがちな女子学生が分野や学年を越えて集まり、自分たちのやりたいことを実現させる場として、さまざまな活動を展開しています。例えば、女性同士のネットワークづくりを目指して開催しているのが、「理系女子のためのエンカレッジ交流会」。将来への抱負や研究の意気込みを語り合う中で、ふだん交流のない学生同士が親睦を深め、友人を増やしていきます。活動は学生の交流促進にとどまらず、子どもたちに科学の面白さを伝える「出張実験セミナー」や理系の魅力を

発信する「女子中高生理系進学推進セミナー」なども、学生が自ら実施。理系女子ならではの視点を活かした活動を繰り返し広げています。

幅広い活動に高い評価

また、男子学生も男女共同参画できるように、女子学生だけではなく男子学生も対象にした「理系人の人生ガイドセミナー」を開催したり、女性の活躍促進に関する内閣府のコンペティションに参加したりと、活動が拡大。こうした幅広い活動は学内外から高く評価されています。そして、「理系女性としての生き方、働き方を意識するようになった」と、あかりんご隊に所属する学生から声が上がるように、その活動は将来のキャリアを考えるきっかけにもなり、学生たちは大きな成長を遂げています。

男女共同参画のパイオニアとして 女性たちの活躍を応援

男女共同参画室

充実した支援により
女性教員比率が上昇

本学は全国でもいち早く男女共同参画を推進し、その取り組みを大学の重要な事業と位置づけてきました。2003年には男女共同参画室を設置し、画期的な施策を次々と実行しています。具体的には、ワークライフバランスをサポートするために、職場と同様に自宅でも仕事ができるITシステムや、学内保育園・学内学童保育所を整備。また、文部科学省の女性研究者支援事業においては、研究と家庭の両立支援や女性研究者の積極的な採用を進めてきました。加えて、独自に女性の雇用を促進するため、理・工・農学系における上位職の女性教員増を目的とした女性枠を設置。優秀な女性PI(Principal Investigator)を採用しています。こうした取り組みが成果を上げ、現在、

本学の女性教員比率は旧7帝大の中で第1位。2012年度の国立大学女性教員比率においても、実数増ではトップとなっています。

次代を担う女子学生を育成

女子学生への支援については、次世代女性リーダーの育成を目指す博士課程教育リーディングプログラム「『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム」を展開するほか、若手女性研究者によるフォーラムなどを開催し、理系女子学生の育成・支援にも努力。さらに、愛知県や名古屋市などとも連携し、地域における男女共同参画の活動も牽引しています。今後も男女共同参画室を中心に、全学で取り組みを進め、男女共同参画社会の早期の実現を目指していきます。

子育てを支える安心の環境

学内保育園

学内学童保育所

東山キャンパスと鶴舞キャンパスそれぞれに、学内保育園を設置。教職員の勤務形態に柔軟に対応しながら、仕事と家庭生活の両立、子どもたちの健全やかな成長を応援しています。病気や病後の子どもの受け入れにも対応し、看護師と保育士が看護・保育を行うなど、働く親の悩みに即したサービスを提供しています。

女性教員の声に応え、2009年、全国初となる学内学童保育所を設置。地域のタクシー会社と連携し、子どものお迎えサービスを導入するなど、小学校入学後も安心の子育て支援体制を整えています。夏休みには、研究者が講師として天体観測会を行うなど、大学の機能を活用した多彩な教育プログラムも特色です。



1 学内保育園
2 学内学童保育所

世界最高水準の研究大学へ。

ノーベル賞受賞者に代表されるように、多くの優れた研究者を輩出してきた名古屋大学。その研究力に磨きをかけ、世界最高水準の研究大学として発展するために、若手の育成や国際化、産学連携、アジア展開など、新たな戦略を次々と打ち出しています。研究担当である國枝秀世理事・副総長が、その目的や展望を語ります。



國枝秀世
Hideyo Kunieda

1950年生まれ。名古屋大学大学院理学研究科博士課程中退。理学博士。専門分野はX線天文学。宇宙科学研究所教授などを経て、2005年より名古屋大学大学院理学研究科教授。名古屋大学理事(研究・学生支援・入試関係担当)副総長。

若手研究者がリーダーとして 伸びやかに活躍できる研究環境を

若手・女性研究者を採用し
研究活動を支援する

名古屋大学は研究大学強化促進事業において、「若手が飛躍するNagoya University」をテーマに若手の育成と国際化の施策を打ち出し、支援対象となった22機関のうちトップ4に選ばれました。本学は4人のノーベル賞受賞者を輩出していますが、受賞した先生方の中心となる仕事は若い時代に取り組まれたもので、今後も先人たちに続く研究者を輩出するには、若手が集中して研究に打ち込める環境が必要です。また、女性が研究を継続しやすい体制づくりも不可欠であり、本学では以前から若手・女性研究者支援に力を入れてきました。例えば、2010年にスタートした名古屋大学若手育成プログラム(YLC)^(※1)では、大学の自己資金で若手研究者を5年間雇用し、その挑戦的な研究活動を支援しています。既に初期に採用した研究者の中には各大学で

正規採用される人も出て、次のステップへの後押しにもなっています。こうした実績の積み重ねが、採択の際、高い評価につながったものと実感しています。

着実にステップアップできる
キャリアパスを構築

今年度からの新たな取り組みとしては、YLCに女性枠・外国人枠を設け、優秀な女性研究者や外国人研究者の積極的な採用をスタートさせました。また、基礎研究から産学連携までを一貫して支援する研究支援体制を整備し、ますます研究支援を加速させています。さらに、今回の採択を受けて、国内外の研究動向を分析するイノベーション戦略室を設け、東京にオフィスも開設しました。東京オフィスは情報収集の拠点とすると同時に、本学の先端的な研究活動をアピールする窓口にしていく予定です。今後は、助教から講師への採用を促進するテニュアトラック制度を新設し、優秀な若手が安心して職を得て活躍

(※1)
名古屋大学
若手育成プログラム(YLC)

若手教員を採用・養成する戦略的なプログラム。学内枠では、本学の大学院博士課程後期課程または博士課程の修了(予定)者を10人以内、原則任期3年(最大5年)の助教として採用。2014年度からの女性枠・外国人枠では各3人以内を採用。



名古屋大学 東京オフィス

持続可能な世界を実現する アジアのハブ大学

できるキャリアパスの導入を目指して
いきます。

一流の研究者が集まる
世界的研究拠点を

昨年度、本学は国立総合大学内で科学研究費の採択数が研究者一人あたりではトップとなりました。国立大学の運営費交付金が毎年削減される中で、研究者一人ひとりが研究活動を続けようとして懸命に努力しています。大学としては、特に若手研究者の研究活動支援に力を入れ、世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)に採択された「トランスフォーマティブ生命分子研究所(ITbM)」をモデルに、国内外の第一線で活躍する40代の研究者を集め、学内に最先端国際研究ユニット(学内WPI)を形成しようとしています。また、助教などの若手が分野横断的に集まって新分野の創成を目指す研究ユニットの形成は、本学ならではの特色ある取り組みと言えるでしょう。従来、助教は教授

の研究プランのもとに研究を進めているわけですが、「教授のレイバーから独立したリーダーへ」を合言葉に、独立した研究者へと成長できるプランを構築しています。

世界のものづくり産業に
貢献する使命を担って

本学は研究大学として最先端研究を推進する一方で、世界のものづくり産業の集積地にある大学として、産業界に優秀な人材を送り出し、新たなイノベーションを創出していく使命も担っています。そのために地域や企業のニーズに応えようと、大学の持てるシーズを開放し、さまざまな産学官連携を進めています。

シーズの一つは超高压電子顕微鏡施設^(※2)で、触媒反応、電池反応といった化学反応の様子をその場で観察できる世界初の顕微鏡を備え、その利用を支援しています。また、放射光を用いた先端計測分析施設「あいちシンクロトロ

ン光センター」^(※3)の設置にあたっては、本学は設計段階から参画してきました。センターは主として民間企業の利用に供され、地域産業のイノベーション創出をバックアップしています。もう一つ、この地にある本学の強みを象徴するのが、自動車産業や航空機産業などが参加する名古屋大学ナショナルコンポジットセンター(NCC)です。炭素繊維複合材料の世界的な開発拠点を目指し、次代の自動車や航空機などの構造部材に関する技術開発を進めています。

新たな産学官連携のカタチ

一方、これまでの産学官連携とは異なり、10年後、20年後の社会はどうあるべきかという視点から、素材や装置などの開発だけではなく、社会のシステムをデザインしようというのが、多様化・個別化社会イノベーションデザイン拠点(名古屋COI拠点)です。高齢化社会にあって、誰もが活き活きと暮らせる社会や新

(※2)
超高压電子顕微鏡施設
1965年に、全国に先駆けて50万ボルトの電子顕微鏡を設置して以来、世界最先端の装置を導入。他の国立大学などと設立した「超高压電子顕微鏡連携ステーション」の一翼を担い、全国のユーザーに装置を開放している。

(※3)
あいちシンクロtron光センター
2013年に産学官が連携した「地域共同利用施設」として開設。「シンクロtron光の産業利用」を前提とした設計を行っており、生まれる成果を新しい産業の創造や地域産業の高度化へとつなげていく。

(※4)
ナショナル・イノベーション・コンプレックス施設(NIC施設)
産学官が集積する研究施設。企業の研究開発拠点や愛知県、豊田市などのオフィスを設置するほか、海外の大学・イノベーション拠点との連携を図り、産学官連携研究のグローバル化を推進する。2014年開設予定。

(※5)
ヤング・リーダーズ・プログラム(YLP)
文部科学省の留学プログラム。アジア諸国での活躍が期待される行政官、経済人などの若手指導者を日本の大学院などに招へいし、1年程度の短期間で学位を授与する。本学は2003年より医療行政コースで受け入れを開始。

しいモビリティを創造するために、産学官で社会のシステムまでも含めたイノベーション創出に取り組んでいます。このCOI拠点は、新しく開設されるナショナル・イノベーション・コンプレックス施設(NIC施設)^(※4)に置かれ、企業も施設内に実験室を持って、一つ屋根の下＝アンダーワンルーフで連携を進めるのが特長です。企業にとっては大学の施設を活用できますし、大学にとっては企業と直接、共同開発をしたり、学生に企業の研究開発を体験させたりと、双方にメリットがあると考えています。

世界最先端レベルでの
教育・研究連携

研究支援を強化している本学ですが、今後の発展を考えると、グローバルな研究大学として研究力とともに国際競争力を高めることも必要です。人口減少が進む日本では、海外からの優秀な留学生の受け入れが不可欠ですが、日本の大学の教育・研究が世界で認知

されていないために世界的な大学ランキングの順位が上がらず、留学生の選択に影響を与えているように感じます。そこで、本学の医学部ではオーストラリア・アデレード大学、ドイツ・フライブルク大学との3大学間連携による医学博士号の共同学位の取得を可能にする教育プログラムを新設しました。日本人学生は海外の大学で、留学生は本学で教育を受けることで互いの教育・研究の質を確認できれば、いずれ本学の海外での評価も高まっていくはずです。このような国際共同教育研究講座を学内にどんどん増やし、教育も研究も世界最先端のレベルで連携したいと考えています。そして、世界を牽引する日本人リーダーを輩出するためにも、現在、年600人程の日本人学生を海外に送り出していますが、将来的には全員を海外へ派遣したいと考えています。

アジアのハブ大学を目指して

また、21世紀の持続可能な社会の実

現は、発展著しいアジアがカギを握っています。そこで本学は、世界の動向を見すえながら地域の特色にも配慮したグローカリゼーションの視点から、今後はアジアをフィールドに世界の持続的な発展を目指す教育・研究を展開していきます。一方で、アジア諸国では本学に留学し修士号を取得した多くの卒業生が、母国の中枢で活躍しています。その中には博士号取得を希望する人も多く、これまでに法整備支援やヤング・リーダーズ・プログラム(YLP)^(※5)で広げてきたネットワークを活用して現地に名古屋大学アジアサテライトキャンパスを開設し、職に就きながら博士号が取得できるプログラムを計画しています。こうした先駆的な取り組みを通じて、本学は学術憲章に掲げる勇氣ある知識人をアジア・世界に送り出し、持続可能な世界を牽引するアジアのハブ大学へ発展するとともに、魅力あるグローバルなNagoya Universityを目指していきたいと考えています。



トランスフォーマティブ生命分子研究所(ITbM)



超高压電子顕微鏡施設



あいちシンクロtron光センター



ナショナルコンポジットセンター(NCC)



ナショナル・イノベーション・コンプレックス施設(NIC施設)



アデレード大学、フライブルク大学、名古屋大学の覚書調印

キャンパスASEAN

大学の世界展開力強化事業^(※)であるASEAN諸国等との大学間交流形成支援に採択されている、名古屋大学の「ASEAN地域発展のための次世代国際協力リーダー養成プログラム(通称

キャンパスASEAN)」」。名古屋大学日本法教育研究センターを活用した日本人学生の派遣やASEAN諸国の企業でのインターンシップなどを通じ、ASEAN地域と日本双方の経済・法・政治・社会・文化に対する共通理解を持った、次世代の国際協力のリーダーを養成します。

自分の可能性を広げるために

キャンパスASEANプログラムのもと、学部2年次の後期にインドネシアのガジャマダ大学法学部へ。今後の世界を担うであろう東南アジアを多面的に知りたい、英語や現地語の向上を図りたい、日本とは異なる新しい環境に挑戦し、自分の可能性を広げたいと思い、留学に臨みました。留学先では法律科目を受講し、インドネシア人や他国の留学生と友情を育み、日本語を友人に教え、ともに旅行をし、日系企業でインターンシップを行うなど、さまざまな経験をしました。

日本の常識から脱却し 現地の文化や習慣を尊重する

これらの経験を通じて、強く感じたことが二つあります。一つは自分がいかに「日本の常識」に囚われていたのか、

ということです。現地で生活をする中で、現地の人々の考え方や文化に驚くことや苛立つこともありました。しかし、それは自分が日本の常識や文化を中心にすえて彼らを見ているのであり、自分の常識や文化を押しつけてはならないと痛感しました。現地の文化や習慣を尊重できなければ、友人づくりもビジネスもうまくいきません。それは海外で長期間過ごしたからこそ、理解できたこととも言えます。もう一つは、自分には大きな可能性があるということです。途上国で、何もわからない状態から半年間を有意義に過ごすことができたことに、誇りを感じます。また、英語だけでなくインドネシア語の習得や途上国で得た経験は、将来の選択肢を広げるものであると信じています。留学で得た知識、経験、知見を活かして残りの大学生活を過ごしていきたいです。

(※)

大学の世界展開力強化事業

文部科学省の事業。アジアおよび米国などの高等教育ネットワークの構築を図ることで、日本の大学の世界展開力を強化し、グローバル社会で活躍できる人材の育成を目的とする。

キャンパス・アジア

大学の世界展開力強化事業である「キャンパス・アジア」中核拠点形成支援の一つで、日中韓3か国の交流を促すCAMPUS Asiaパイロット・プログラム。名古屋大学では、「東アジア『ユス・コムー

東アジアの中の自分を見つめて

2年から3年次の1年間、韓国に留学しました。留学と聞くと基本的には欧米や英語圏を想像すると思いますし、「東アジアに留学して何が得られるのか?」と誰もが疑問に思うでしょう。では、私が韓国派遣で得られたものは何かというと、語学力、海外で暮らす自信、各国の友人などいろいろありますが、あえて一番大きいものを挙げるとすれば、「東アジアという枠組みの中で自分、もしくは日本について考える視点を得られた」ことだと思います。

多様性や違いを受容する力が これからは重要になる

私なりの解釈ですが、欧米圏への留学の場合、自分は「異質」な存在として現地で生活を送るでしょう。肌の色や言語、考え方、あらゆる異質性の中で、自

ネ』(共通法)形成にむけた法的・政治的認識共同体の人材育成」と、「持続的社会に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点」の2つが採択され、それぞれ中韓の大学と連携して短期・長期の留学を実施し、単位の相互認定や学位の授与などを行っています。

分や日本を考えることになると思います。しかし、東アジアへの留学となると状況が変わります。もちろん、国が違えば自分が「異質」であることは当たり前なのですが、東アジアは想像以上に日本と似ており、道を歩けば日本と同じような光景を目にします。それなのに何かが決定的に違う。この「ある程度同質性の中での異質な自分(日本)」という視点と、その違いを認識し、受容する力は日本にいる間はもちろん、欧米に留学しても得られなかったものであり、アジア地域が世界で影響力を持つだろうと言われている今、重要な視点ではないでしょうか。もちろん、このような視点や力を完全に身につけたとはとても言えませんし、まだまだ勉強が必要なことばかりですが、これからも多様性や違いを受容できるような人間を目指したいと思います。



永田 碧

Midori Nagata

法学部3年

派遣先：インドネシア

(2013年8月～2014年2月)



辻 卓弥

Takuya Tsuji

法学部4年

派遣先：韓国

(2012年9月～2013年8月)

派遣学生からのメッセージ

強いつながりを持つアジア諸国が 交流と教育のフィールドに

名古屋大学では、アジア諸国との間で築いてきたネットワークを駆使し、成長著しいアジアと日本の持続的な発展に貢献できるグローバルな視野を持ったリーダーの育成に取り組んでいます。

博士課程教育リーディングプログラム

広く世界で活躍するグローバルリーダーの育成を目指す名古屋大学では、
現在6つの博士課程教育リーディングプログラムを通じ、特色ある大学院教育を展開しています。

「ウェルビーイングinアジア」 実現のための女性リーダー 育成プログラム

本プログラムは、さまざまな発展段階にある多文化社会アジアにおいて解決すべき課題である貧困問題、多様な健康問題、ジェンダー格差などに深く関わる「食・健康・環境・社会システム・教育」をキーワードに、ウェルビーイング

の実現に資するグローバルに活躍する女性リーダーの養成を目指します。ウェルビーイングとは、個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味します。



法制度設計・国際的制度移植専門家の養成プログラム

法整備支援や日本法教育を通じ、本学が築き上げてきたアジアでの基盤を活用し、制度移植の現場で必要な実践力を鍛えます。英語+アジア言語を解する語学力や組織の運営能力があり、国境を越えて魅力ある制度を構想・設計できる専門家を育てます。



PhDプロフェッショナル登龍門 ーフロンティア・アジアの地平に立つリーダーの養成ー

今後も日本が成長するには、ものづくりを再生し、アジア諸国との連携を担う人材が必要です。そこでカンボジア、タイといったフロンティア・アジアを舞台に、博士号を取得した上で社会のあらゆる場面で活躍できるプロフェッショナルを輩出します。



実世界データ循環学リーダー人材養成プログラム

社会的価値の創造には「受け手の望み」を絶えずくみ取り、「作り手の技術」で製品やサービスに結びつける循環が求められます。本プログラムでは工学・情報科学・医学・経済学の分野にまたがり、実世界データの「取得・解析・実装」

を扱う新しい学問領域「実世界データ循環学」を確立します。さまざまな分野にまたがる技術の循環に気づき、それらをつないで循環を築くことで、社会的価値の創造を担う産業リーダーを育成します。



グリーン自然科学国際教育研究プログラム

グリーン自然科学分野における本学の実績に立脚し、日本屈指の研究機関と連携しながら、学生間の切磋琢磨を通して、この分野の次世代を担う企業研究者、アカデミア研究者、環境科学コーディネーター・メンターの育成を目指します。



フロンティア宇宙開拓リーダー養成プログラム ー産学官連携と理工横断による次世代産業創出を目指してー

理工を横断する宇宙利用・開発に不可欠な俯瞰的視野を育むほか、産学協同の超小型衛星計画ChubuSatを活用し、学生がチームで宇宙開発プロジェクトを実践する機会を提供。宇宙利用拡大をもたらす次世代産業のイノベーションを牽引する人材を育成します。



大学概要

概 略	
総 長	濱口道成
理 事	山本一良（教育・情報関係担当）・副総長 藤井良一（財務・男女共同参画関係担当）・副総長 鮎京正訓（総務関係担当）・副総長 國枝秀世（研究・学生支援・入試関係担当）・副総長 渡辺芳人（国際・広報・社会連携関係担当）・副総長 竹下典行（人事労務・施設設備・環境安全・事務総括関係担当）・事務局長 横田 昭（産学連携関係担当[関東地区担当]）● 学外・非常勤
副総長	鈴置保雄（評価・総合企画関係担当） 松尾清一（産学官・病院経営関係担当） 市橋克哉（法務・リスク管理・人権関係担当）
監 事	熊田一充 ● 学外 浅野良裕 ● 学外・非常勤
職員数	大学教員1,701名 附属学校教員39名 専門職・事務職員・技術職員1,898名 合計3,638名
面 積	土地面積3,270,268㎡ 建物面積787,681㎡ ※職員数、面積は平成26年5月1日現在

学部・大学院学生数 平成26年5月1日現在			
部局名	学部学生	大学院学生	合計
文学部・文学研究科	600 (26)	274 (88)	874 (114)
教育学部・教育発達科学研究科	323 (20)	246 (38)	569 (58)
法学部・法学研究科	696 (19)	314 (101)	1,010 (120)
経済学部・経済学研究科	956 (28)	108 (52)	1,064 (80)
情報文化学部	367 (12)		367 (12)
理学部・理学研究科	1,226 (33)	590 (36)	1,816 (69)
医学部・医学系研究科	1,564 (7)	990 (99)	2,554 (106)
工学部・工学研究科	3,456 (138)	1,601 (173)	5,057 (311)
農学部・生命農学研究科	738 (16)	413 (39)	1,151 (55)
国際開発研究科		284 (166)	284 (166)
多元数理科学研究科		162 (12)	162 (12)
国際言語文化研究科		192 (100)	192 (100)
環境学研究科		432 (92)	432 (92)
情報科学研究科		364 (66)	364 (66)
創薬科学研究科		75 (1)	75 (1)
人間情報学研究科		1	1
合計	9,926 (299)	6,046 (1,063)	15,972 (1,362)

※(内数)は留学生数
※学生数には、学部・大学院研究生、学部・大学院特別聴講学生、聴講生、特別研究学生、科目等履修生を含まない

教育学部附属学校生徒数 平成26年5月1日現在			
学校	入学定員	学級数	生徒数
中学校	80	6	240
高等学校	120	9	355
合計	200	15	595

沿 革	
【前身校期】	
1871(明治 4)年	仮病院 仮医学校開設
1872(明治 5)年	義病院設置
1873(明治 6)年	仮病院 医学講習場設置
1875(明治 8)年	愛知県病院設置
1876(明治 9)年	公立医学講習場 公立医学所設置
1878(明治11)年	公立医学校設置
1881(明治14)年	愛知医学校設置
1901(明治34)年	愛知県立医学校設置
1903(明治36)年	愛知県立医学専門学校設置
1908(明治41)年	第八高等学校設置
1920(大正 9)年	愛知医科大学設置 名古屋高等商業学校設置 (官立移管)名古屋医科大学設置
1931(昭和 6)年	
【帝国大学(旧制大学)期】	
1939(昭和14)年	名古屋帝国大学創設(医学部と理工学部の2学部) 名古屋帝国大学臨時附属医学専門部設置
1942(昭和17)年	名古屋帝国大学理工学部を理学部と工学部に分離
1943(昭和18)年	名古屋帝国大学航空医学研究所設置(1946年廃止)
1944(昭和19)年	名古屋工業経営専門学校設置(1946年廃止) 名古屋経済専門学校設置 名古屋帝国大学附属医学専門部設置
1945(昭和20)年	岡崎高等師範学校設置
1946(昭和21)年	名古屋帝国大学環境医学研究所設置
1947(昭和22)年	名古屋大学(旧制)と改称 名古屋大学附属医学専門部設置
1948(昭和23)年	名古屋大学文学部、法経学部を設置

【新制大学期】	
1949(昭和24)年	旧制名大、医専部、八高、名経専、岡崎高師を包括 文、教育、法経、理、医、工の6学部および 環境医学研究所で新制名古屋大学として発足 空電研究所、附属図書館、分校(教養部)を設置
1950(昭和25)年	法経学部を法学部と経済学部に分離
1951(昭和26)年	農学部設置
1953(昭和28)年	文学、教育学、法学、経済学、理学、工学の6研究科を設置
1955(昭和30)年	医学、農学の2研究科を設置
1961(昭和36)年	ブラズマ研究所設置(1989年廃止、核融合科学研究所へ発展)
1963(昭和38)年	教養部設置(1993年廃止)
1971(昭和46)年	大型計算機センター設置(2002年廃止)
1973(昭和48)年	水圏科学研究所設置
1977(昭和52)年	名古屋大学医療技術短期大学部併設(2001年廃止)
1990(平成 2)年	空電研究所を太陽地球環境研究所に改組
1991(平成 3)年	大学院国際開発研究科設置
1992(平成 4)年	大学院人間情報学研究科設置(2003年廃止)
1993(平成 5)年	情報文化学部設置 水圏科学研究所を大気水圏科学研究所に改組(2001年廃止)
1995(平成 7)年	大学院多元数理科学研究科設置
1997(平成 9)年	大学院農学研究科を大学院生命農学研究科に改称
1998(平成10)年	大学院国際言語文化研究科設置
2000(平成12)年	大学院教育学研究科を大学院教育発達科学研究科に改称
2001(平成13)年	大学院環境学研究科設置 地球水循環研究センター設置
2002(平成14)年	情報連携基盤センター設置(2009年廃止) 大学院医学研究科を大学院医学系研究科に改称
2003(平成15)年	大学院情報科学研究科設置

【国立大学法人期】	
2004(平成16)年	国立大学法人名古屋大学設立 大学院法学研究科実務法曹養成専攻(法科大学院)設置
2006(平成18)年	エコトピア科学研究所設置
2009(平成21)年	情報基盤センター設置
2012(平成24)年	大学院創薬科学研究科設置

組織・機構

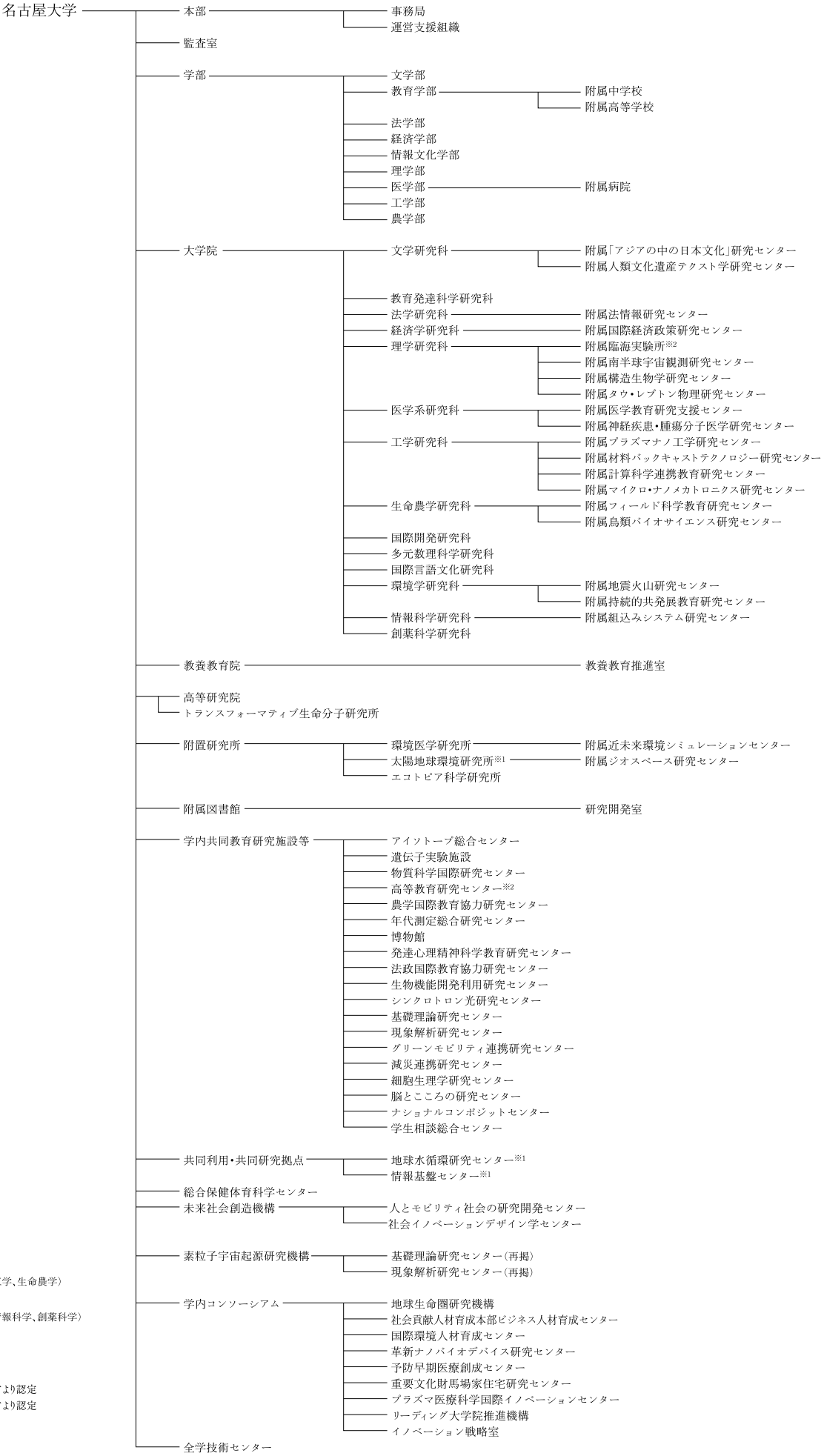
9学部
(文、教育、法、経済、情報文化、理、医、工、農)

8研究科
(文学、教育発達科学、法学、経済学、理学、医学系、工学、生命農学)

6独立研究科
(国際開発、多元数理科学、国際言語文化、環境学、情報科学、創業科学)

3附置研究所
(環境医学、太陽地球環境、エコトピア科学)

注 ※1は共同利用・共同研究拠点として文部科学省より認定
※2は教育関係共同利用拠点として文部科学省より認定



名古屋大学プロフィール 2014

発行年月／2014年6月
企画編集／名古屋大学総務部広報渉外課

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel. 052-789-2016
<http://www.nagoya-u.ac.jp/>